

## 要旨

### 曖昧：イタロ・ズヴェーヴォの文学的戦略と結末の関係

石井沙和

ズヴェーヴォ作品の研究においてしばしば言及されるテキストの「曖昧さ」について分析することが本論文の目的である。「曖昧」と結論づけられるテキストの効果は、登場人物や語り手、作者の意図が読者にとって不明瞭になるよう提示されることに起因する。特に主人公のユーモアやアイロニーによって言動の両義性が強調され、さらに語り手による批評とそのアイロニーが物語に挟み込まれることで更に語られる内容の解釈の幅が広げられる。同時に、語り手は「信頼できない語り手」としてテキストに介入するため、語られる内容の信頼性は貶められ、読者は真相を追求するため積極的にテキストに関わる姿勢が求められる。

ズヴェーヴォのテキストの特性である曖昧さについては、以上のようなテキストと読者の共同作業の論理、あるいはテキストのもつアイロニーによる両義性・二重性に議論が集中し、分析の対象としてズヴェーヴォの傑作とされる『ゼーノの意識』のテキストに依存する傾向が強い。確かに、ズヴェーヴォの主人公や場面の設定には自伝的要素が含まれることが多く、主人公・場面設定ともそれぞれ作品群に共通の性質を持っているため、特徴がより明確に表れる『ゼーノの意識』に着地する分析は効果的である。加えて焦点人物として設定された主人公の自意識の強さ、それによる語り手の内的独白的傾向、これらの特徴がテキストに対して支配的であるため、主人公を観点とした分析は妥当である。しかし、それらの特徴に偏った分析だけでは、曖昧さの生成がそれらズヴェーヴォ独自の特徴のみに負うものであるような印象を与え、他の傾向や設定が見過ごされる。

ズヴェーヴォのテキストの曖昧さは、主人公のアイロニーが生み出す二重性と「信頼できない語り手」によるテキストに対する不信、このふたつの特徴が生成する意図の不明瞭化のみによるものではない。作品は自意識的な主人公を焦点人物とするため、不明瞭な意図は確かにテキストに対して支配的であるが、意図の生成に別の要素が加わることで、テキスト全体に曖昧な印象を生み出していると考えられる。そこで作品群に共通する他の特徴的設定に注目し、再度「曖昧」について分析する。それにより、より補完的な考察を得られると考える。そこで着目するのは、結末の設定である。ズヴェーヴォのテキストには結末

に向かって消失する視覚イメージが認められ、主人公や語り手による意図の曖昧さに加え、消失イメージがテキストの曖昧さを生成する。そこでズヴェーヴォのテキストが持つ曖昧さを結末との関係から分析し、意図の曖昧さを保った物語の完結と、結末に向けた消滅イメージの合致にどのような関係があるかを考察する。

消失イメージは、登場人物が遠ざかるイメージと共に生成される。それはどこか遠くへの移動、あるいは死によるイメージで、煙や霧といった視界を曇らせるような描写が付随する。曖昧さと消失イメージの関係を探るにあたり、結末を導く設定に着目し、主人公、登場人物の相関関係、遠ざかる設定からどのように消失イメージが生成されるか検討する。それと同時に、消失イメージを設定するズヴェーヴォの思考法をたどることで、曖昧さの生成との関係を分析する。その際、ズヴェーヴォの代表作品である長編三作品『ある人生』、『老境』、『ゼーノの意識』に加え、消失に付随する遠ざかるイメージが特徴的に表れる『つかのまセンチメンタル・ジャーニー』と『よくできた冗談』の二作品を中心に考察する。消失が描かれる結末の設定を分析するため、まず登場人物の相関関係を取りあげる。結末にむけて主要な登場人物四人のうち必ずひとりが消失するため、主要登場人物による関係をカルテットとみなし、人物が排除される必然性を考察する。その際、ジラルルの欲望の三角形を基本とした分析を行い、カルテットが内包する排除の運動が欲望の運動に基づくものとする。そうすると、人物が排除されるのは、主人公の直線的欲望の達成を目指すことによることが明らかになる。排除の運動において、直線的欲望の達成のために主人公内部でも運動が起こる。それは語り手が主人公に対して指摘する「誠実」という性質によって示される。「誠実」というのは自己の二重性を含む概念で、個人的自己と社会的自己が一致する状態が「誠実」である状態となる。テキストに即してこの誠実を読み解くと、この二重性の一致による主人公の「誠実」は「自身の欲望に忠実である」状態を表す。また主人公とともにカルテットを形成する他者は、距離を保った存在として描かれ、遠ざかるよう設定される。遠ざかる人物は、欲望の運動にもとづくカルテットにおいて欲望の対象となっており、場面から遠方へと退場させられることで主人公の欲望を保存する役割を負う。消失イメージの生成は、排除の運動を内包する主要登場人物四人によるカルテットという作品設定によるもので、それによって、主人公が欲望を保存する過程が描かれている。

主人公を通して欲望の保存の過程を描く際、自己の二重性が強調される。自身の欲望に忠実である状態の「誠実」が内包する二重性に加え、人物が遠ざかる設定においても二重性は表れる。主人公の欲望を保存することを目的として設定された、欲望の対象の遠方への消失を、作品の背景であるトリエステという都市空間から読み解くと、街が内包する帰属意識の二重性が浮かび上がる。民族的・文化的な多様性を抱える空間で個人は現在地であるトリエステと自身の帰属である故郷の地の双方に帰属意識を持ち、自身が二つの帰属

意識の境界となる。同時に、同じ民族間でも、同郷者たちとは起源を同じにしながらも現在地が異なるため、同じ起源の人間の間でも異質性に対する意識が生まれる。トリエステは、故郷と現在地、双方向のベクトルが作用し異質性と同質性が互いに規定しあう空間であり、帰属意識の遠心性と求心性により異質性と同質性が相互規定することで、主体は起源と現在地に対する帰属意識を維持し、現在形の自己が二重の帰属意識の境界となる。主体は自己の二重性を意識することで内包する境界を持続的に更新し、また現在形の自己を意識することで主体性を確保する。

ズヴェーヴォの作品に描かれる空間は、常に繰り返される境界の更新を反映し、持続的な現在の確認による現在の更新を示す。作品は自意識的な主人公を焦点人物として物語を展開し、そこに「信頼できない語り手」の中でも「信頼性の低さが暗示された以上の語り手」による批評を挟み込むことで意識的な主人公の言動の意図を曖昧にし、読者に不信や疑念を与えることでテキストとの距離を確保し、批評的視線をテキストに向けさせる。また主人公の物語と語り手の批評から生まれる時制の往復運動によって、語りの時制は絶えず現在に立ち戻るようすり抜け、さらに曖昧な印象を与える。

ズヴェーヴォの作品では設定、語りともに読者に現在を意識させる。それはズヴェーヴォにとって本来時間は存在しないが、人間が認識することで時間は捉えられないながらも唯一現在形で存在し、過去は現在の模倣、未来は現在の延長となるからである。その現在形の中で生きる人間にとっては主体性の確認による現在の更新が不可欠である。それゆえズヴェーヴォは語りを通して読者を二重性の中におき、現在の連続性において遠くに開かれた可能性を受入れる追体験に導く。ズヴェーヴォは遠ざかる消失イメージを通して、語りと登場人物に対する「不信」、「無責任」な語り手、「暫定的」な語りによって「捉えられない」現在、「不完全」な過去と「不明瞭」な未来に対する姿勢を、「持続的に生成する現在が持つ可能性の複数性」に開かれている状態として描くため、テキストに曖昧さが生成される。

曖昧さは読者に対する巧妙で実践的な仕掛けであり、ズヴェーヴォは「不完全」「不明瞭」「不信」「疑念」「無責任」「暫定的」といったネガティブな要素をテキストに折り込み、信頼性の低い語りで読者に批評的距離を保たせ、結末に向けて曖昧な印象を生成することで読者自身に意図を追求させる。ズヴェーヴォの語りと結末の消失イメージは、読者の「読む行為」の積極性を引き出す効果的な戦略である。